

## ひと

## 「女子柔道の母」と呼ばれる米国人

Rusty

Kanokogi

ラスティ・カノコギさん(73)



米国人女性で最高の7段を持つ。「柔道は人生の教科書。他人を尊敬し、自らを磨くことで成長できた。一生『柔道家』でいたい」。この人

なしに、女子柔道の隆盛も、ヤワラちゃんの五輪メダルもなかった。ニューヨーク出身。10代の頃は不

良少女だった。家庭は貧しく、やり場のない不満と怒りを路上で殴り合うことで発散した。19歳で柔道に出会う。小よく大を制する場面が「魔法のようだった」。夢中になった。

1950年代、柔道は女性の試合を認めていなかった。髪を短く刈り上げ男装して畳に立った。59年、州大会の団体戦で優勝した。だが女性とわかると、1人だけメダルを剥奪された。「屈辱だった。これからの人にこんな思いをさせたくない」

柔道界に女性への門戸開放を求めて立ち上がる。ニューヨークで自力で開いた80年の第1回世界女子柔道

選手権は、家を抵当に入れ、手製のTシャツを売って資金を集めた。国際オリンピック委員会相手に論争を

挑み、92年のバルセロナ五輪での女子柔道の正式種目採用を実現した。長年の功績が認められ昨秋、旭日小綬章を受章した。60年代半ば、米国に来ていた鹿子木という姓の日本人柔道指導者と結婚している。

07年秋、骨髄腫で余命3年と宣告された。それでも柔道について語る時、力強い笑顔を失わない。「米国に日本女子のトップコーチを招いて教室を開くのが夢。たとえ私が死んでも後に続く人に道を残したい」

文・写真 村上尚史